

D-1 児童の生活構造の時代的変遷に関する総合的研究(そのI) 幼児の生活空間について
大妻女大家政 〇大竹智恵子 平井信義 山本キウ

(目的) 激しい時代の変化に伴い、児童の家庭における生活構造もまた急速な変化に迫られている。本研究は、児童の生活構造が時代的にどのように変化してきているかについて、都市・過疎地域における児童の生活の実態を食住衣・保育・教育形態、家族関係・経済の面から把握し、さらに、両者の比較を行い、それに基づいて今後の児童の家庭生活に対する対策を確立することを研究の目的としている。本報では、都市の幼児の生活構造の実態について報告する。その1は、幼児の生活の場を住宅・地域環境との関連でとらえ、幼児の生活空間について報告する。

(方法) 条件 5才児の長子、核家族。対象 都内8園、近県1園の幼稚園に依頼し上記の条件の幼児を持つ97世帯。調査期間 昭和47年2月下旬～3月上旬。調査方法 面接質問法(大項目17、小項目70)。尚、整理の結果、収入の分布にひらき加認められたので、経済条件をおさえるために平均収入100,860円(±3,800)より7万～14万未満(66人)を中核グループとし、他については事例的に検討。

(結果) 幼児にとって遊びは生活の中心を占めるものであるが、その遊び場は、自分の家の屋内48%、屋外37%である。屋内遊びと屋外遊びとを比較すると、周囲の危険性が遊び場に影響していることを知った。住宅空間については、3部屋以上が64%、また、遊びに使われる庭を持つている58%は空間的広がりを持つている。独立した空間として子ども部屋を持つているのは28%、もしくは自分の区画を持つているのは61%あり、家庭の中での幼児の生活の場が考慮されている。